

うなことから等である。

幼児が表現する音楽的内容は、本人はもとより他者が音楽であると判断しにくい場合がある。それは、音楽的内容というより無意識的な音声や身体的な表現、感情などであったりする。それは一見して音楽と全く無関係であるようにも考えられる。しかし、幼児のそうしたことはやがて音楽表現と密接に関連してくるようにも見える。

そこで、私は上記の3つの視点から、幼児の音楽における音楽領域について、問題提起を行いたい。

<領域「表現」における身体表現>

大阪教育大学 古市久子

幼児の身体表現を考える場合、子どもにとっての表現、保育者の問題、身体表現自体のもつ力の3つの視点から検討し、表現手段は身体であるが、子どもの表現を総合的にとらえる観点を見いだしたい。そして、身体表現は、特に表現的な環境とのやり取りを重ねることで静かに育つことが特徴であることを明示して、それぞれの表現形態で意味があることも合わせて提案したい。

1. 「幼児にとって表現とは」

身体を使って行われることは、声も含めて広義で身体表現と考えたい。幼児にとって身体表現とは表出を表現に導いてくれる大人とのやりとりなのか、自分の欲求を投げたときにぶち当たる壁の存在を確認することなのか、表現することで社会につながるパイプをつくることなのか、心の解放のプロセスを総括することなのか、それらが時期的にどのように、どの程度、幼児に関係してくるか等について考える。

2. 「保育者はどうかかわっていくか」

幼児の身体表現を引き出し、育てるためには、人的な環境が大切であるが、保育者はどうかかわっていくか。①表現をくみ取る目をもつこと、②言葉かけの問題、③体験を豊富にする環境創り、④楽しさ・爽快感を持たせる、⑤共感する等をどのように具体的に実践していけるか。加えて、⑦保育者自身が表現的であること、⑧幼児の表現はカウンセリングマインドで援助する等が考えられる。付随する問題として、表現は⑨感じる心を大事にすることが前提であろう。そして、感じる心が動き、ふきだすようなエネルギーに昇華させるように導いていく必要がある。

3. 身体表現自体がもつ特性からの視点

身体を使った表現だからこそ、と言う部分も大切にしたい。「リズム性」では、一斉に行いながら、同期できている快感が個人に属し、合わせることで楽しさや快感が得られる、安心感を与える等である。「表現性」ではコミュニケーションができる、模倣欲求を満たす、創造意欲が刺激される、身体言語としての役目を果たす等が考えられる。

<領域「表現」における造形表現>

聖心女子大学 水島尚喜

1. 小学校指導要領の内容構成について

新しい図画工作の内容は、従来と同様に「A表現」、「B鑑賞」の2つの領域で構成されている。「5領域」による細分化された枠組みから、この2領域に移行してすでに20年以上が経過した。その措置は幼児から連なる児童の総合的な造形活動の特性に根ざして、大人の領域観による文化要素的な造形学習の形態を改め、児童の造形活動を丸抱えしようとするものであった。しかしながら実際には、表現と鑑賞という領域が、学習指導のための実体的な活動区分として機能してきた側面もある。

2. 子どもの表現行為とは

一般に内なるものを外へ表すことが表現(expression)行為として、受け止められている。このことは、抑圧(repression)の概念との関係からも示されているように、自己内部にあるものを外に押し出すという表現理論に支持されている。しかしながら本来子どもたちは、対象世界とのかかわりの中で、表現や鑑賞(見たり、感じたり)の活動をわけへだてなく連続的に行っている。そして活動のきっかけは子ども自身の五感から派生するものであったり、外在的なさまざまなことの要素であったりする。そのような場における表現行為は、内にあるものを外に表すというよりも、外界との交流活動と位置づけられよう。つまり外界と共振し、発見的に制作することで、自己を定位しようとする試みとも考えられる。

3. 造形遊びのとりえから

幼児にとっての表現活動は一方向の発話としての表現ではなく、世界と対話するための双方向的な行為ではなかろうか。幼児の表現活動から、そのようなダイナミックな側面が示唆されている。

項目「造形遊び」の措置なども紹介し、幼児から児童に至る造形表現の特質と教育状況などにふれたい。